

『林京子論―語りえぬものの実存を追い求めて』

本論は「林京子論―語りえぬものの実存を追い求めて」をテーマとして取り上げ、語りえぬものの実存という見えない内面の折り重なった錯綜的な諸相を作品を通して考察した。

作家林京子は長崎で原爆を生き延びた一人である。日中戦争中の中国上海で幼女期、少女期の十四年間を過ごし、一九四五年三月長崎市に引き揚げ、八月九日、学徒動員先の工場で被爆した。このように林京子の被爆体験は、植民地体験、また引き揚げ体験の延長上にあり、一人の少女の大人への成長、その人格形成に最も決定的な影響を与えた惨事の経験である。そしてこの一人の少女の成長過程に決定的な影響を及ぼした惨事は、二十世紀後半に至るまでの日本近代化の過程における惨事であり、植民地、引き揚げ、被爆体験という三重の体験は、現実的体験であると同時に、その過程を表象する象徴的な意味を孕んでいる出来事であり、体験であるといえるだろう。それだからこそ、被爆体験を抜きにして林京子の作家への成長を考えることは出来ない。しかし、林の作家への道程は長い時間を要した。作家としての最初の作品は被爆体験を扱った『祭りの場』であるが、それが書かれるまで三十年という時間がかかったのである。この三十年の長い沈黙、それは、大岡昇平が選評で「隠さなければならなかった」と述べている以上の深く錯綜した意味を内包していると考える。それは「隠した」のではなく、「語れなかった」であり、林の沈黙は「語りえぬもの」の表現であったとさえ言えるのではないかと考えた。その沈黙は「語りえぬもの」は作家の内部に増幅し、記憶を醸成し、表現への回路を時間をかけて作っていたのだと思う。

林京子の代表作『祭りの場』は、同じ動員先の工場でその場に居合わせた多くの友人や同時代の若い女性たちの暴力的な死、一瞬の無惨な大量殺戮に対する衝撃を表現している。「被害者も加害者もなく、悲しいのは人間だ」「どうして同じ人間にウジ虫がたかるのだからか」という問いかけには、無意識のうちに、人類全体に目が向くような問いかけを突きつけてくる力が潜められている。「人間の尊厳」を問う根本的な問いから出発しているのである。林京子はこの語れなくなった被爆体験、言葉そのものを見失ってしまう原爆の沈黙を「祭り」の原型象徴によって表し、戦争暴力、人間社会における暴力を明るみに出した。「祭り」には、内在する精神の原型が現れたのである。このような林文学における三〇年の「沈黙」の意味を、つまり、内面への移行である原型を一つ一つ軸として本論では考察した。その衝撃は作品のクライマックスをなして読者を劇場に観客として惨事に参加しているかのような衝撃、深い哀悼と怒りの感情を引き起こす。

本論では、「語りえぬもの」として、林京子の三十年の時間をかけて内面化された「被爆体験」が林京子の実存そのものであり、語りえぬものの実存の表象が作家を生み出す源泉であることを探求した。三十年間も封じこめられた「沈黙」は、「祭り」というメタフオアで打ち破られた。「祭り」は林文学の象徴体系と内在的世界観を浮かび上がらせたのである。さらに、語りえぬものの実存は、経験の記号ではなく、記憶という経験の衝撃の痕跡によ

って形成される実存である。それは直接表現では語りえないし、そもそも語られないことよって記憶化し、痕跡化した、いわば影の実存であると考える。祭りのメタフォアと記憶＝痕跡を本論の考察の基本的なアプローチの手段として用いたと思う。林文学は、長い年月をかけて恐怖に追い込まれた、核の時代における人間の生の営みを掘り下げている。痛み、恐怖、絶望によって孤立されている女性の存在を抉り出し、林の記述する行為自体が内面の精神世界に向って多重層的なものが込められている。「記録からは落とされていく、記録に残らない」、語りえなかった沈黙を表出することは、その空白部分を埋めようとする行為であり、林にとって書くことは、すでに生きることそのものといえよう。被爆者は語れない。その沈黙が、強いられた状態を拒絶する逃走であり、「沈黙という抵抗」を示している。

本論でさらに強調したいことは、林文学の核には、女たちの沈黙が見つめられていることである。原爆の沈黙は被爆者自身に受け継がれて内面に封じ込められ続け、語られることのない実存である。長崎ガラスの器にすべてひびが入ってしまったように、被爆者は肉体的にも精神的にも深い傷を受けている。原爆症や直接、産む不安につながった原爆被害者の女性の体験（生理・結婚・妊娠・出産・子育て等）というものは、なおさら、そこで沈黙させられたり、隠されたりしてしまう。「祭り」は、失ったものを取り戻すことと失わせていたものが再び存在することの象徴であるのではないか。「祭り」は閉じ込める側面があり、同時に開放的な側面がある。「見えない壁に出口をうがっ」ものである。本論では、林文学の「語りえぬものの実存」を「祭り」を通して明らかにした。それは、「人間に課せられるもつとも大きな悲しみであろうそれを」「祭り」は「共有」しているからである。「祭り」の「場」へ辿り着いたのである。すなわち、「祭り」は「見え隠れする」ものを現わす場所である。まったく新しいテキストを作り出しているといえよう。内面的に抱え込む沈黙、つまり心の深層の原型を文学テキストによって「擬製」の祭りを立てている物語といえよう。

林文学のもう一つの思考の糧となっているのは、「根になる主題」の「外地の原体験——上海」であると考ええる。外地への記憶は、上海の「陽の世界」と「負の世界」、つまり「見え隠れする現実の中から」「正負の世界」の問題が浮かび上がってくる過程であり、「上海」は一つのメタフォアといえよう。そして、林京子のアメリカ体験『トリニティからトリニティへ』は、「グランド・ゼロ」が象徴的かつすべての人に「グランド・ゼロ」の真相をさらけ出していることを表している。「グランド・ゼロ」は始まりと終わりが同時に存在する恐怖、ゼロになる恐怖である。闇とゼロは林京子の精神世界の時間だけではなく、出発点である長崎から終着点であるトリニティまで一つの環となって大きく円環を作ったのである。その円環には、被爆者自身に受け継がれて内面的に続いていくもの、子どもたちに伝わっていくものが込められており、「六日・九日」は「私」の内部で「人間」の問題として残されてきた。林京子の物書きとしての出発点は「八月九日」にあるが、「グランド・ゼロ」は一つの到達点である（大地も被爆したという認識に辿り着く）と考える。沈黙している被爆者を語らせない、被爆者の生と死を語りたいと希求する林京子は、円環を描いてそれ

を変貌させ、実際には原体験を越えて新しい意味を形成したのである。「マイナスにしか指向不可能な出発点のゼロの荒野」は、最終的に人間の生存の境遇まで指している。生命はあらためて始まらないが、書くことは彼女に新しい生命を与える。亡くなった人の命が現在の命に溶け込んで、一つの持続性を獲得させたのである。林京子は〈記憶〉〈体験〉〈原爆〉と、トリニテイに行く行為とを関連させ、「無の中に有る」という境地を生み出している。これまでになかった原爆と向かい合う問題を提起したのである。

林文学は「呪文のようにつぶやく」巫女のごとき詠唱ともいえよう。惨事に巻き込まれた人の記憶は、無意識の領域をとっている(水田宗子)と同時に、核時代に生き延びる「意味を再生産」しているといえよう。「祭り」は「語りえぬものの実存」の根源的なものであり、生きる尊厳と尊厳の死を照らし出す。「祭り」への長い道程、生と死を混在する「祭り」への内面的探求こそが「いま」を生きる人を蘇生させていると理解する。この、理解という課題には、「元気づけ」、「慰めを喪失」しないで生きる物語を構成する支点があると言える。代々受け継ぐ「祭りの文化」は、「文明化した」国々の「進歩発展」、文明に振り回されるありかたに抵抗していることになる。原爆の惨事を記憶―再生し続ける林文学には、忘却への怒り、産めない身体への怒り、怒りを晴らす原動力が内心から発せられて沈黙のままではいられないことを読み取れるが、『核戦争』恐怖の時代に私たち人類が直面する問題として示唆しているのだ。見えない死の恐怖や生きることの耐えない不安と生々しくつながっている。この消えない不安が語りえぬもののコアではないだろうか。